

2012.01.04 冬の刈谷大会、講演

ゆいごん

板倉聖宣

2012.03.30 井藤伸比古編集

竹田美紀子テープ提供

(前書き：井藤)

「ゆいごん」と、多久和さんにもらった短いメモにありました。ドキッとしました。そのドキドキはずっと止まりませんでした。「ゆいごん」を、板倉さんは冬の大会でしゃべったらしいのです。その全部を聞きたくて聞きたくて、竹田さんに頼んでテープを送ってもらいました。ついでに、こうしてテープ起こしたというわけです。

私は「ゆいごん」には苦い思い出があります。5年前、松崎重広さんを病院にお見舞いに行ったとき、松崎さんが「今から遺言を言うので、聞いてほしい」と言ったのです。真剣に聞けませんでした。まさか〈なくなる〉なんて思っていなかったからです。半年後に現実になってしまいました。私は、ずっとその遺言を思い出せませんでした。

さて、いたくらさんの「ゆいごん」は、何だったでしょう。こうして気になっていたことを残すことができ、私は幸せです。

1 今から〈ゆいごん〉の話をします

わがまま言ってすいません。新幹線の中で、『ウェッジ』(新幹線車内誌, 2012.1月号)という雑誌を見て、急にお話しくと思いました。(ホワイトボードに書く)

ゆいごん

これからお話することは「ゆいごん」です。漢字で書くと、あやふやなのでひらがなにしました。『ウェッジ』という雑誌は、経済誌です。経済的な記事が多い。だから「中国の話の新幹線車内で読んで過ごそう」と思っていたら、こんな記事がありました。

「熱湯で曲がる金属ガラス実用化に挑む(牛越製作所)」

こういう記事は、あやしげなことも少なくないのですが、気になります。読んでいるうちに「冬の大会でお話ししたい」とムラムラしてきました。〈金属ガラス〉なんておかしい言葉ですね。「金属はガラスではない」「ガラスは金属ではない」ふしぎです。

「ゆいごん」の話というのは、仮説実験授業研究会の中で

「〈学ぶに値いすることは何か〉を見つけて、それを教える」

ということです。学ぶに値いすることは何か。そういう研究はすごく遅れている。日本の産業は、世界の産業だと思います。そんな日本の中で、最も遅れているのが教育産業です。圧倒的に遅れている。

JR東海とかが、新しい学校を作って、未来の教育を志向しています（海陽中等教育学校）。それでもほとんど受験対応です。本当に学ぶことは何か。それを発見して、その教え方を開発する。おそらくそういうことができる学校は、ルネサンス高校だけです。研究会会員で、そういう学ぶに値いすることを探して教育をする。

この「熱湯で曲がる金属ガラス」という新しい産業を起こしているのは、長野県諏訪の会社です。諏訪といえば、教育で伝統がある。そこの中小企業の社長が〈金属ガラス〉というテーマをとりあげた。すでに大企業も〈金属ガラス〉は取り上げているんですが、その会社は高価な〈金と銅の合金〉で作る。それでもって需要をさぐる。

その技術は、2009 に開発された。ごく最近です。だからくわしいことはわかりません。そんな話があったときに、あなたはそれにどう対応しますか。まず、その社長の学歴は、どうでしょう。

ア. 一流大学出身。

イ. 二・三流大学出身。

ウ. その他。ろくな教育は受けていない。

さてどうでしょう。みなさん考えてください。

社長の牛越さん(牛越製作所)は、東京理科大学出身です。短大しか出ていない。若い人で、父の会社を受け継いで社長になった。その人が金属ガラスの開発を始めた。一流のエリートがやっているわけではない。

その人は研究者ではありません。その基本的な研究をした人は、東北大学の助教授です。その人は、どんな人だと思いますか。

ア. 一流大学出身。

イ. 二・三流大学出身。

ウ. その他。ろくな教育は受けていない。

准教授の張緯さん、名前が読めません。中国人です。日本の最新技術を、中国人が開発しているんです。最近、中国のものがたくさん輸入されているので、気にしている人がいる。多少ばかにしている人もいます。でも、「中国人で日本の大学にいる」という世界があるのです。

2 5年後の仮説実験授業はどうなっているか。

さて、この社長さんは、なんで金属ガラスの開発を始めたのか。

それは、数年前、見知らぬ人から「5年後にあなたの会社は何をしていますか」と聞かれたことから始まりました。企業コンサルタントの人だったらしい。5年後のことなんかわからない。ふつうの人だったらね。社長でもわからない。本当はわかっていないといけないと思うけど。

そして、社長さんは「何とかしなくちゃ」と思った。そのコンサルタントから「東北大学で、金属ガラスの研究をしている。やってみないか」と言われた。

大きな会社だったら、いろいろお偉方がいて、討議していて、なかなか決まらない。その社長さんは、30人くらいの会社だから自分で決断する。「世界でだれもやっていない」「それなら我々でやろう」というわけです。ようするにエリートが新しい産業を開いたわけではない。

5年後、どうしているか。そういう話を讀んだとき、すぐに私は思いました。

5年後、仮説実験授業研究会はどうなっているか。

5年後、仮説実験授業はどうなっているか。

たしかに言えることは、今ある授業書は、少しは追加されて教え方も充実している。しかし、新しい教材を作る人がいるだろうか。どうもこれまでの仮説実験授業の授業書は、ほとんどが私が中心になって作ってきた。本当はたくさんの人に作ってほしいんだけど、なかなか作れない。

ふつうの日本の教育は、指導要領、教科書、受験準拠で成り立っている。その枠をとっぱらったのが仮説実験授業です。仮説実験授業が新しいのは文部省の指導要領に従わない。「本当に学ぶに値すること」と私が考えることで作っている。それで成功したんですね。〈たのしい授業〉もできるようになった。

が、新しい教材を作ろうとする人は、なかなか現れない。いないわけではないけれど、非常に少ない。

3 〈アモルファス〉の授業書は、なぜできないか

古い教材にも、全く新しい世界がある。仮説実験授業で《もしも原子が見えたなら》は、最も定評のある教材です。だけど、これを教えやすくする努力をする人はいますけれど、抜本的に変えようとする人はいない。

例えば、〈もしも原子が見えたなら〉は、発展して《三態変化》《結晶》ができた。ぼくが今、気になっているのは、〈結晶〉の概念の他に〈液晶〉の概念があるでしょ。そんな〈液晶〉の概念を教える教材を作った人がいるか。〈液晶〉というのは新しい概念ではありません。100年以上前にできた言葉です。それなのに「〈液晶〉を初等教育に入れる」ということは全くなされてない。「すごくむずかしい」と思われているのかも知れない。

その話に関連するのが〈アモルファス〉です。《もしも原子が見えたなら》をやった人は、〈アモルファス〉という言葉ぐらい知ってほしい。〈アモルファス〉とは結晶でない固体です。結晶でない固体＝全くバラバラです。〈結晶〉がすばらしいのは、きれいに並んでいることです。でもそれは社会主義的・軍国主義的です（笑）よね。〈アモルファス〉はバラバラで、自由主義的、経済主義的です。

そんなバラバラはつまらないか。実は、すばらしいんです。未来への可能性がある。そういう新しい世界が、急速に発展している。みなさんが知っているアモルファスは〈太陽光発電〉です。日本の技術が最高です。アモルファスを知らなければ、最近の科学は論じられない。ぼくは、前からアモルファスについてわかりやすい研究をしようと思って、本をかなり集めました。

〈金属ガラス〉というのも、原子がきれいに並んでいるのではない。そういうものの液体を急激に冷やすと、整列しない。子どもたちと同じだね。長い時間をかければ、先生が強引に整列させられる。子どもたちだけで勝手にやっている所を急激に冷やしちゃう。これがアモルファスです。アモルファスの〈ア〉は、アンチの〈ア〉＝〈ない〉という意味です。だから覚えやすい。

その会社は、今の所、少量の金と銅の化合物を作っている。《もしも原子が見えたなら》のうんと小さいナノレベルの技術です。でかいことはできない。でも時間の問題です。教育産業の出番かもしれない。アモルファスについて最も詳しいのは教育産業だから。

そういう種類の教育はだれが考えるんだ。文部省は考えませんからね。産業界からうんと言われればやりますよ。その前に、考える人がいない。

だいたい仮説実験授業研究会の中で、最も学力の高い人たちは、高等学校の先生です。高等学校の先生は、ほとんど受験体制対応です。そのすきまに仮説実験授業の授業書をする。それはしかたがないことです。そういう一方で、「本当に学ぶに値することはなんだ

ろう」と考えて、勉強してほしい。それは科教協もやっていないし、だれもやっていない。やったのは、ほとんどぼくの周りだけです。

4 だいたいの考えで、ものごとを考える能力

小学校の先生が「本当に学ぶに値することはなにか」を考えてもらうのは、ちょっと大変です。だから特に中学高校の先生にやってほしい。

仮説実験授業研究会の人も、時代離れしている。今度《太陽系の成り立ち》という授業書を作ります。最初の問題は「どっかに金星が見えますよ」と聞く。どこを探せばいいのか。空全体を見ても見つからない。北斗七星なら、北を向けばいいでしょ。金星はどこにあるのか。ある意味では、太陽に近い所にある。それ以上に、東から出て西に沈む太陽の道筋を探せばいい。それが授業書の中心になります。

そうすると、学のある人はうるさいことを言う。「その日の太陽の道筋ではない」「夏と冬とは違う」「板倉さんは学がない」と、何人からも指摘されました。そうではなくて、〈だいたいの考え方で、ものごとを考える能力〉がないとダメなんです。

《もしも原子が見えたなら》で分子を作ったりするときも、うるさいことを言う人がいる。「分子模型は、もっとこうしないといけない」と。そういう細かいことに順応できる人も必要かも知れないけど、うんと大まかに哲学的に考える能力を身につけてほしい。

さらに気になったのは、『ウエッジ』の記事の文章です。比較的読みやすい。でもぼくの基準からすれば読みづらい。これに〈囲み符〉をつける。はるかに読みやすくなる。

〈囲み符〉をつけるという能力は、国語教育でやればいい。でも国語教育で、〈囲み符〉をつけるということを尊重している人がいるか。まだまだ少ない。〈囲み符〉の話は、『たのしい授業』にもたくさん出ていると思うけど、その能力があればこういう文章が読めるんです。

さらにここにはグラフがある。このグラフがよくない。仮説の人だったらすぐ直せます。グラフを工夫する能力、うんと一般的な能力がほしいんです。

5 根本的なことを考えて授業書を作る

仮説実験授業では《ほんとうの数うその数》という数学の授業書ができました。反響が少ないですね。そんな教育は「文部省でやれ」と言っていません。でも《ほんとうの数うその数》をやれば、ほとんどすべての子どもは喜びます。特に、数学教育に落ちこぼれた連中ほど喜びます。数学教育がいやなのは、おとぎ話だから、本当の数かどうか分からないものをいじらせる。

たけどね、〈ほんとうの数うその数〉という認識の仕方は日常生活で重要です。たとえばマスコミのものは、いちばん重要なところがうその数になる。「週刊誌がいつ出たか」ということを調べるのは絶望的です。出版物はみんなうそつき。「〇年3月31日発行」というのは大部分がうそ。「〇年3月31日に発行」されないというだけの話です。4月に発行されたならまだいいんですが、本当は6月とか8月に発行されている。

これは科学史なら、大変な問題です。論文の先取権がどちらにあるか。ノーベル賞がそっちに行ってしまうかもしれない。実際、そういうことがある。酸素を発見されたとき、フランスとイギリスとが争っていた。日付は、校正で付け加えられたりする。科学史家はだまされる。だからぼくはそういうのに詳しいんです。

本当のことを知るのは、大変なんだ。数学教育は「本当の数がわかっている」として操作する。そういうことが始めから気になった。ぼくは子どものときから計算をばかにしている。細かな計算ができるなんて、どうでもいいことだ。そういうところから乗り越えないと、数学嫌いが救えない。

「物を言うのが得意な人」は文学者です。文学者は、たいがい数学、科学が嫌いです。そういう人たちの発言を聞けばいい。

そういう数学、科学が嫌いな人は、ぼくらの《ほんとうの数うその数》を教えたら、絶対に好きになると思います。「こういう数学教育だったらオレ数学好きだよ」と言ってくれると思う。でも、まだそういう人たちに普及する体制が整っていないんだね。

学ぶに値することは何かを見つけて、それを教える。基本的には、教え方ではないんです。教える哲学ですね。哲学というのは、ボクは、一般的には嫌いなんです。哲学というのは、うそを言う学問でしょ。うそを言うからいやなんだけど、うそを言うからすばらしい。未来のことを言ったってわけがわからない。わけがわからないから、いろんなことが言えるんです。

仮説実験授業が提唱されてしばらくして「仮説実験授業の消費者です」ということを堂々と名乗る人が増えて、とてもうれしかった。「無理をして授業書を作る人だけが研究会の会員ではない」「消費する人も研究会の会員だ」と。だけど、それを容認しすぎたのか、だれも授業書を作ろうとしなかった。これは困る。

授業書を作る人は、哲学性の高い人です。ものを知らなくたっていいんです。知っている人は、たいていはできない。

これから幸いなことに、仮説実験授業研究会の会員がどんどん定年になっています。その暇を利用して、根本的なことを考えてほしい。指導要領も何もなかったら、いったい何を教えるか。私は、教科書も指導要領もほとんど見ません。だから自由に考えられる。

6 常識にとらわれなくて考える

だけど、「教科書も指導要領も見ない」ということは、必ずしも偉いことではない。《光と虫めがね》という授業書。あれはある時、私の研究所の隣に小学校があるんですが、その先生が突然やってきて「明日、光の授業をやらないといけない」「何か教えてくれ」と。見も知らぬ先生です。「あつかましい人だな」と思ったんですが「助けてほしい」と言う。そのときに何を教えるか。

「教科書を見せて」と言ったら、そこに〈レンズでものを燃やす実験〉があった。その実験は、日本の理科教育史で、いちばん有名で、いちばんみんなが好きな実験です。明治の頃から大好きです。そのことをボクは気づいていたんですが、ふつうの人は気がつかない。なぜ好きか。破壊的だからです。実験もうまく行く。その実験が定着したもんですか

ら「焦点は点だ」と思っている。「焦点というくらいだから点に決まっているじゃないか」と。日本の国語教育だったら「点は点」ですよ。

ぼくは子どものときから、一生懸命いろいろな虫めがねを集めて、きちんと焦点が点になるような虫めがねを探した。見つかりませんでした。そんなボクは他の子から「全然、学がない」を思われていたかも知れない。でも、それが大切なんです。

あれは、点ではなく太陽の像なんです。そこが《光と虫めがね》の中心となった。学のある連中なら知っていますよ。いい先生につけば知っています。

私は〈虹の7色〉問題を追究しました。あきれたことに、それなりに尊敬できると思っていた人たちが〈虹は7色〉と暗記で覚えているんです。先日、ある日本の地質学者に会いました。その人は、アメリカにずっといて、教授になって帰ってきた。地質学では大きな仕事をして、学士院賞もとっている。大学のときから私の本をたくさん読んでくれていて、私より1ε才年下なんですけど。その人に〈虹の7色〉問題を話したら、「虹は7色ね、赤・橙・…」とさっと言った。暗記の仕方を覚えている。こういう人たちが、日本の超一流の学者なんだ。こわくなりました。

私は、覚えなくても学者になれたほとんど希有の例です。覚えたい。自分自身の感性でものごとを考える。だから、学があることは大事ではない。子どもと同じような感性を持って「人間が学ぶに値することは何か」と哲学的に考える。哲学的に考えると、うそっぱちだとわかる。今まで常識と思われていたことがうそっぱちだとわかる。さらに本当のことがわかる。

7 自分たちにやれることをやる

今、「政治史」つまり「仮説実験授業的な歴史」を考えています。私の研究は、〈うそっぱちなこと〉から始まります。

中国の現代史なんて、全然知らなかった。中国で〈文化大革命〉が起こったときは、私が仮説実験授業を始めたちょうどその頃で、忙しくて中国のことなんかかまっていられなかった。何となくは知っていました。

それで「どうも中国の大躍進はあやしい」「文化大革命はあやしい」と調べ始めたんです。はじめは「学がない」ことを誇りにした。学がないけれども、『たのしい授業』に原稿が載るときには、絶対にミスがないように、うんと基本的なことでミスらないようにします。勉強するんです。今、中国現代史の本が、私の書齋に、私の身長ぐらいまで積み重なっています。発行年代順です。

全部、読んだか。バカなことを言うんじゃない。そんなもの読むバカはいない。いざとなったときに「その本が必要になる」ということです。観光ガイドの本も買いました。

「〇年〇月〇日」に出たと書いてある。ぼくは引用するとき「〇年〇月〇日」とはぜったい書かない。うそだもん。「〇年〇月」と書く。そこまででもあやしい。

明治の頃はちゃんとしていました。『東洋経済雑誌』という科学雑誌があります。それを見ると「私は〇月〇日に、〇〇に行きました」とあります。けれども、その発行日を見ると、その2日後に出ている。

今の雑誌では、そんなことはありえない。日本人は、みんなうそつきになった。そういううそつきは、強要されてなったわけではない。ほとんどすべての雑誌社で、自分で勝手にやっている。それは儲けになるからです。独占資本主義のためです。そういうところに〈資本主義の悪さ〉が出ている。それに気がつかない。「資本主義が悪い」と言っている連中が気がつかない。自分たちでやれることをやらない。うそをついていないのは、ぼくのやった雑誌『ひと』『たのしい授業』だけです。書いてある発行日が実際と合っているのはね。

あきれたことに「元号反対」という運動を起こした文化人が、その人の本の奥付は「昭和」になっている。どうして自分たちでやれることをやらないんだ。出版社に「自分の本

は西暦で書いてくれ」と言えればいいのに、やらない。それで政府に対して文句を言っている。そういう自覚のない文化人は、ぼくはきらいです。

いろいろなことで姿勢を正す。その点、新中国ができたときの革命は偉かった。原理原則を通す。日本では「上官が部下をなぐる」ということは当たり前でした。だけど、新中国の革命軍は「ぜったい上官が部下をなぐってはいけない」ということを貫きます。それだけでも、革命の価値が決まっちゃう。

8 〈天才論〉から〈個人崇拜〉が生まれる

ぼくは、最後の方の毛沢東は悪人だと思うんですけど、初期はすばらしい。そういう研究は〈天才論〉です。〈天才〉という概念がある限り、ああいうおかしなことが起こる。

天才という言葉でいちばん有名なのが〈万能の天才〉です。ぼくは「天才なんていないんだ」と、でかい声で言う。そう言えるのは、東大の学生のと看、ぼくのことを〈天才〉と呼んでいた東大生がいたんです。そういうことを聞いてびっくりして「天才と呼ばれるとはどういうことか」が気になった。ちゃんとしていないと、個人崇拜は止まらないし、とんでもない事態になる。

そういうことで、仮説の大会、特に冬の大会は、哲学的な話がうんとできるような場にしたい。そういうことで、無理にお願いして、私の話をいちばん最初にしてもらいました。だいたいふつうの会では「そんなことはできません」と言うんです。大事なことは大事なんで、私は仮説の会でなくても、うちの研究所の会でも科教協の会でも、言います。

ただ私自身が「大事だ」と思っても、他の人は「大事だ」と思わないことがある。それぞれの事情によって違います。自分が代表だから無理に「やらせろ」と言ったらどうなるか。毛沢東(1893-1976)は、そういうことをやったんです。

彭徳懐(ほうとくかい1898-1974)という人がいます。毛沢東にいじめられた。その人は、国民軍の部下にいちいち相談しています。それで、命が助かった。「共産主義の敵を絶滅しろ」と言って、皆殺しが図られたとき、彼は部下にすごく慕われていて「あいつを

殺すわけにはいかない」と。彼の自叙伝には「どういうことを相談したか」が事細かく書いてある。そういう種類のことがあります。

結局、〈天才論〉なんて研究するというのは、私の領域とは必ずしも言えません。しかし、そういう天才論がちゃんとしなから、みんなおかしくなっちゃう。だいたい私の天才の定義は「ある発想法に成功した人」です。「今までの人と違う発想をして、それで当たった」「大きなヤマが当たった」んです。それは偶然ですよ。何も天才だからではない。例えば、私が仮説実験授業を提唱したのは偶然です。何も天才だからではない。ただ他の人からは〈天才〉に見えちゃうんです。1つのことをやった人は、たいがい2つ3つとやるんです。1つのことだったら「偶然だ」と思うでしょ。だけどそれは偶然ではない。

例えば、私は自然科学の授業書を作っている。社会科学の授業書も作っている。外から見ると〈天才〉に見えちゃう。それは、自然科学の考え方で仮説実験授業が成功したら、社会科学をやるんです。成功するに決まっている。次から次に成功する。

だからレオナルドダビンチの時代は、みんな〈万能の天才〉だったんです。やる人がいなかったから。みんな〈天才〉に見えた。それは、自由主義的の自分を大切にする。原子論的な考え方を大切にする。それで成功する。

ただ、こっちで成功したからと言って、他でも成功するとは限りません。少なくとも、天才と呼ばれたとしても、自分を「天才だ」と思っはいけない。

9 〈仮説実験的認識論〉があれば、独創的になれる

昨年(2011年)春の「東日本フェルティバル」は中止になりました。「震災があったから、やめよう」という話があったとき、私は最後の最後まで「かんたんに判断しないでくれ」とがんばった。でもね、〈衆愚政治〉はだめですね。周りの人の意見を聞くと「やっぱり震災があるとできない」となる。で、私に相談もなしにやめちゃった。「こんな大事なときに研究会をやらないとは何事だ」「私の責任でもってやる」「10人しか集まらなく

でもやる」と言った。「10人しか集まらないなんてことはない」と思ったけどね。〈そういう問題に対応できる能力＝独創的な能力〉が、必ずしも研究会の人にはない。そういう独創的な能力がないと、日本の今後、世界の後は危うい。

今後、中国は日本にとって否応なしに大きな関係になる。そのときに、現代中国についての考え方が間違っていると、大変なことになる。ぼくの同年輩の人は、〈社会主義中国〉が好きです。その後の中国は社会主義を裏切った。そういう認識の仕方に、間違いがあったら困る。

そういうことがあって、私の研究は〈仮説実験的認識論〉が中心ですけど、それと同時に〈日本人の今後の問題〉を考えている。さらに中国では、共産党の一方支配で困ったことが起こっている。その問題について、日本人の中で助言できる人は助言したらいい。

鄧小平(1904-1997)という人は「〈仮説実験的認識論〉をかなりうまく使って権力の頂点に行った人」です。有能なんです。彼あたりが本当は「中国は、10年後に共産党の一方支配をやめる」と言えば良かった。あの人ぐらいしか言えなかった。毛沢東と同じように個人崇拜された人です。

「10年後とか20年後とかにやめる」という公約、そういうことは日本の政治でもそうです。沖縄基地の返還問題は、永遠に果てしないでしょ。今の内閣は、何も言えない。

「〇年後にアメリカの傘の下をやめる」と言えばいい。「今年やめる」んだったら、できないに決まっている。そういう議論は、区切ってやめる。そういう助言ができる人がいない。心配だね。大事なものは、長期にわたって未来を構想することなのに、「短期だけ」とか「短期しかないのに怪しげな未来のこと」を言う人がいる。

10 わからないことは〈わからない〉と言う

仮説実験授業研究会で、震災のときに「《放射線とシーベルト》という授業書を作ろう」という話がすすみ応援しました。そのとき授業書に「断固として反対だ」「出すな」という圧力が何人からも来ました。研究会の会員なら「みんなで勉強する資料」なら、どんな

ものでも出たていい。「これは有害な出版物である」というのは一党独裁みたいではないか。どういう考えだったのか。「放射能はほんの少しでも、ぜったい害がある」というのです。すっきりしている。非常に明快でしょ。だから「これこそ正義だ」と思う人がいる。

ところが科学史家である私から私からすれば、微生物が発見されて「体内の微生物はすべて危険だ」「無菌状態にしよう」と考えた人がいる。無菌にしたらどうなるか。かえって危ない。そんな危ない人間はいない。「原子力の話は、それとは違う」という議論があるんですが、わからないことはわからないんです。どうして「わからないことはわからない」というのがいけないのか。「永遠にいかなる放射能も危険だ」というのか。それは仮説実験的な考え方ではない。科学的な考え方でもない。そう思うのです。

最初に大風呂敷を広げるつもりだったんですが、どんどん大きな話になりました。そんなことを考えているのは事実です。

『たのしい授業』で「政治史から見た仮説実験的認識＝現代中国の話」は3回連載になると書きましたが、正月に勉強しすぎちゃって3回では終わりません。

11 反体制を貫くのがいいわけではない

彭徳懐という人は、毛沢東にさんざんばらいじめられて殺されちゃったんです。文化大革命というのは悲惨な結果になりましたけれど、あれは毛沢東が判断をまちがって自分への個人崇拜をかき立てた。それで、ぼくはそういう問題についてすごく詳しいんです。なぜか。それは「世界でマルクス主義に近い人で〈個人崇拜はいけない〉ということを一いちばん強く言ったのは三浦つとむさんです。三浦さんは、まだスターリンがいばっていたときに〈スターリン批判〉をした人です。私は、三浦さんのいちばん有力な弟子筋になっちゃうんです。私はそう思いませんでした。あとになって「三浦つとむを囲む会」を作ったとき、それを組織したのは私です。他の人は作りませんでした。

私は、ソ連でスターリンが全能だったときに「欧米の左翼的な知識人の中に、スターリンの間違いに気づく人がたくさんいる」と思った。ところが、だれもいなかった。私にとっては驚きです。共産党が嫌いだった人がスターリンを信用しなかったのは当たり前です。私は、そうではなくて世界で唯一「スターリンはまずい」と気づきうる人間だった。

だから、それを生かせる人間がいるなら、それを生かして仕事をしないといけない。そういう気持ちがあります。

「スターリンの個人崇拜はとんでもない」「そんなのはソ連にいない人間にはわかりっこない」とも思います。しかし日本のマルクス主義に関係する団体は、ほとんどが個人崇拜です。

ほとんど自分に責任を持たない。そんな知識人ばかりの社会はだめになる。そういう問題を私は提議する。もう私の年齢になると、言うべきことは言っておかないとまずい。若い人は知らないけど、仮説実験授業研究会の中にもマルクス主義的な考えの人がいっぱいいる。いろんな人がいる。しかも反体制を貫いていて「仮説実験授業は、何となく共感できる」とやってくれたんです。

若い人も知っておいた方がいい。欧米でも〈ヒトラー〉は禁句です。〈ヒトラー〉について教えない。そうではなくて〈ヒトラー〉も〈スターリン〉も〈毛沢東〉も教えなければならぬ。

〈オーム真理教〉なんて、個人崇拜で、とんでもないことをやった。新左翼の末裔だった指導者が「オーム真理教がサリン事件を起こすはずがない。警察のでっちあげだ」と言いましたからね。知識人は怪しい。仮説実験的な仕方をずっと続けないとあぶない。

12 私を喜ばせて下さい

そういうことで、仮説実験授業研究会のためであり、いや日本の教育、世界の教育のために仕事をしたい。教育というのは、いちばん〈未来の社会〉につながる、本当はね。今

の日本の教育は、そんなことを設定している人はほとんどいない。そういうことで、少しは冬の大会で、哲学的な話し合いを持ってもらうようにお願いします。

私は「ゆいごん」と言いましたが、死ぬつもりはありません。細々と生きていますから、よろしくお願いします。私を喜ばせて下さい。いろいろ感想を聞かせてください。

(後書き:井藤)

板倉さんの「ゆいごん」はいかがでしたか。板倉さんは、何を「ゆいごん」として残したいのか。忘れないようにまとめてみました。

- 1 〈学ぶに値することは何か〉を見つけて、授業書としてほしい。
- 2 〈仮説実験的認識論〉を世界中に広めてほしい。

わたしは、この2つだと思いました。皆さんは、どう読み取りましたか。

さらに1は、「ともかく授業書を作れ」ではない気がしました。つまり「学ぶに値することは何か」と見つけるのが先で。その上で授業書作成を考えるということではないか。そんな気がしています。

2で気になることがあります。仮説のある研究会(別々の2つの会)で、対立する2つの意見を聞いたのです。

A 仮説実験授業はまだまだ少数派だ。着実な歩みをすすめたい。

B 新しい『学校教育法』『指導要領』の中心的な考えは、まさに仮説実験授業の考えそのものだ。

その2つは全く逆の「認識」のような気がしました。どっちの認識が正しいのでしょうか。ずっと気になっています。

今の私は、板倉さんの話を聞いて「どっちでもいい。ともかく固定的に考えないで、自分自身が主体的に生きればよい」という気がしています。いかがでしょう。

ともかく、板倉さんの「ゆいごん」を大切に心に置いておきたいと思っています。そうそう、松崎さんの3つの遺言を思い出しました。「1 科学読み物のこと 2 グラフのこと 3 息子さんたちのこと」=ずっと大切にしていきます。(2012.3.30)

最近の板倉さんの一連の動きを理解するには、「ゆいごん」を読むのが手っ取り早いのではないかと。そう思い、夏の大会に持っていきます。(2012.7.26)